

## あの農業委員会に 離農奨励できるかな

「離農奨励金で規模拡大!」。実にセンセーショナルな見出しだ。読売新聞9月13日・14日付にその詳細が書かれている。実に大胆で頼もしい内容である。日本の農林水産省もやっとマツク嫌いのスローフード、なにがしが言っている「小さな農家を守る」なんてことを実現していたら、アングロ・サクソン諸国のみならず、近隣諸国からも日本の資産と、清く正しく生きていく大和民族の魂の周りに付いている、穴の毛まで持って行かれるかもしれない恐怖プレーにおののいたのであろうか。

整理してみよう。もし来年度の予算に反映されるのであれば、今後5年間で平均2haから20〜30haに拡大させる。今回の目玉である出し手(売り手)にも新設の交付金と農地の売却益などを得る。とある。

ではこのような交付金は誰の判断で行われるのであろうか? 答えは実質農協と考えられるが、今回は建前上の機関である**農業委員会**のあり方を検証してみよう。

農業委員会は農地の売買など利用関係の調整機関で、ほとんどが選挙により農業生産者等が委員となって事務を執行すると、まさしく民主主

義社会のお手本でもある。が、しかし現実には、長沼のように農業委員会の下部組織で、法律で認められた集落単位の農用地利用改善団体が「あの土地はあれに、この土地はあつちに」となる。過去の例を挙げてみよう。ある農家が5ha売ることになり、譲渡取得税などのメリットがある地域の農用地利用改善団体に話が持ち込まれる。売り手の案件がこの団体に持ち込まれると、誰に売りたいのか、いくらで売りたいのか、すべてやはりこの団体のみの決定で行われる威厳高き組織でもある。その後、地域に連絡が回り、購入したい生産者が数名集まる。あるものは現在60ha規模、あるものは20ha、あるものは35haである。絶対条件ではないが過去の習わしに従い、農地の隣接者、**「班」**と呼ばれる集落の小集落、若い生産者の優先順位が高い様だが、最近はその若い生産者が少なくなったこともあり、購入希望者の面積で決まるようである。それは現在60haの生産者よりも35haの者であり、現実はや

## 宮井的日本のこれから、 農業のこれから

Vol.42



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

り少ない面積の20haの生産者がその5haを購入できない。つまりよほどの理由がなければ「どうぞ、宮井様」なんてことにはならない。実におかしな話である、20haの生産者は何年かけて100ha超えの大規模農家になれるのか? 私に集積したほうが効率の良い農業をできるのは火を見るよりも明らかなことである。小さな農家が集まり効率の良い農業はできない。大規模

オレにも  
言わせる!

北海道長沼発  
ヒール宮井の憎まれ口通信

農家のみがより大規模になれる能力を持ち合わせているのだ。

私の地域の農地の値段は400万円/haを下回ることはないが、隣の大規模農家がない地域は50万円ほど安く、水田に力を入れていた地域はさらに50万円ほど安い。

農地が高く維持できること自体は聞こえはいい。しかし実際は借金の肩代わりで農地の実質的采配者である農協の経営にとつて都合が良いことであり、さらに宮井様が規模拡大しているおかげです、とは間違っても言えない。農水省の担当者のみならず。間違っても今回の交付金のお金の流れが同じ轍を踏む結果となるならば、日本農業を敗退させ、貧しい非資本主義者をのさばらせるだけです。

### 次にナニが起きるか 予言者・宮井が当てます

ところで、このような「小さな農家は止めちまえ！」などと発言できた、できる生産者はいらぬだろうか？ いました。誰？ それは私です。

2007年10月20日、NHKの生番組『日本のこれから』第2部で放送開始後44分あたりに「小さな農家は止めればいい、オーストラリアは17万ドルもらって離農することができると発言したのだ。私はユリ。

ゲラーを超える超能力者なのか？

それとも先見性を持った明るい農村オヤジなのか？ どちらも違う。必要な既成概念やこだわりを持っていないくて、たまたま多くの生産者よりも金髪・ブルーアイに慣れ親しんでいるからなのだろう。

後から聞くところによると、この番組を多くの農水職員が見たらしい。2カ月後に東京で食事をしていると「宮井さんですよ？ 素晴らしい発言でした」と女性職員が突然握ってきた。ナニを？ 手を。

興味深いことがもう一つあった。この番組で三宅キャスターが「日本には39万haの耕作放棄地がある」と発言したが、実は私も5か月前に、同じく生放送された同番組でも同じ趣旨のことを話した。やはり私が話せばその後実現するのか？ 私自身は常識を持ち合わせる生産者として当然のことを言ったつもりだ。

普通、生産者10人集まれば9人は、農水は小さな農家のことを考えていない。農協の組働（信用貸し）の利息は高い、などの大合唱になるのはいつものことで、そのような小作人根性で、**ナニが4インチ**野郎には大規模が唯一の生き残りだと、口が酸っぱくなるほど説明するが理解してはもらえない。

では私が番組で発言して次に農水

が実現することは何か？ それは遣伝子組換えである。最近では安全性を問うような大馬者は消え去り、少し知恵が付いて、同類種との交雑、交配や環境負荷などと、あなたには関係ない話だろ！ に変わってきている。しかしTPPと同じく、世界の組換え作物導入の流れから日本だけが取り残され、生産者のみならず、流通、加工、販売に至る産業に不利益を与えることは許されぬし、またその余裕は日本にはない。

この生番組、『日本のこれから』では金髪・ブルーアイの女性外交官が出席されていた。番組終了後、彼女から「どうしてオーストラリアの離農奨励金を知っているのですか？」と聞かれた。私は「長沼の農家では700軒中、30軒ほどしか読まれていない日本経済新聞を10歳の時から読んでいるからです」と言い、昔オーストラリアで6か月ほど農業実習したこともあることを伝えた。

本能のおもむくまま彼女に「この後、六本木にでも飲みに行きませんか？」とお誘いをした。残念ながら先約があるとのことで、名刺交換をして会場を去ることになり、けんもほろろな対応に半泣きの状態で北海道に帰ることになった。……が、その後、彼女から1週間ほどしてメールをいただき、「今度お会いいたし

ましよう♡」となった。年末、上京し麻布十番駅から5分ほどのところにある亡国大使館に赴いた。正直、何の用なのかわからなかったが、彼女と二人きりかと思ったら、同じく日本語ペラペラの若い男性外交官の3人で近くのそば定食2500円のランチをご馳走になり、2時間ほど日本農業の意見交換をした。当たり前ではあるが、外交官は日本のことをものすごく勉強していて、英訳ができていなかった品目横断的経営安定対策などの日本の農業制度についてもよく知っていた。また何とか藩の殿様はすごいだの、この500年の日本の農業についてウイキペディア並みにペラペラと単語が出てきました。男性外交官は当時の品目横断的経営安定対策のことをバツサリと「ヨーロッパのパクリですね」と言った。さらに「日本人って赤穂浪士が好きですね。でも**仇討からは何の利益を得られませんかよ**、戦後我々が日本と仲良くできたのも、単なる勝者のおごりからではなく、経済を通じてこの環太平洋地域の戦後計画を見据えたからです。素晴らしいでしょ」と言い切った。自画自賛のアンゲロ・サクソンの表現を理解しなければいけない必要性はTPPが迫れば迫るほど出てくるだろう。